

「竹林文庫」を私がはじめて見たのは、平成9年(1997)11月、同志社大学で開催された第45回日本図書館学会研究大会のときである。図書館学の渡辺信一教授(当時)のご案内で見学できた文書類はまだ未整理で公開されていなかったが、その研究上の価値は非常に大きいと思われ、私は「これらの資料は同志社だけでなく国の宝です」との感想を洩らしたと、渡辺先生が『The Doshisha Times』の第518号(平成9年12月15日号)に書かれている。

竹林熊彦は近代日本の図書館史研究の偉大な先達である。実は同志社の研究大会で私は「竹林熊彦と小野則秋の業績を偲びつつ、図書館現代史研究プロジェクトに及ぶ」という題で簡単な報告を試みたのであるが、その力点の一つは竹林の再評価が必要ではないか、という点にあった(小野も「同志社図書館人」で、図書館史家として竹林と並ぶ存在であるがここでは触れない)。そのためには、竹林の業績に関する研究が進展する必要がある。

幸いにも平成17年(2005)3月、竹林文庫の「田中稲城文書」と「竹林熊彦文書」がアーカイブ資料として整理され、公開利用されることになった。以下は、竹林熊彦文書を中心とした「竹林文庫」をめぐっての一利用者としての感想である。「竹林文庫」はいくつかの資料群で構成されており、そのシステムには独自の性格がある、と私は考えている。皆さんがこの文庫を利用する上で少しでも参考になれば幸いである。

さて、「竹林文庫」の構成と性格を理解する上で、竹林の図書館史研究の来歴を知ることが役に立つと思う。竹林自身による研究の回顧として「図書館史研究閑話」(『土』(金光図書館報)48号、昭和32年5月)と「図書館詠言=図書館史楽我鬼」(『土』61号、昭和35年1月)がある。また、彼の経歴については竹林による「著者自伝」(『図書館物語』東亜印刷株式会社出版部、昭和33年5月、同書奥付の短文)、「竹林熊彦先生年譜試稿」(青木次彦、加藤参郎共編『同志社大学図書館学年報』6号、1980年)がある。これらに基づいて、竹林の研究への歩みをスケッチしてみたい。

竹林熊彦は明治21年(1888)、千葉県東葛飾郡国府台村(現、市川市国府台)に生まれた。「兄弟6人、早く父を喪い家道困難、外部の援資と労働とにより、辛うじて大学の門を窺う」とある。苦学して同志社専門学校文科を卒業したのが明治43年(1910)、ついで、大正2年(1913)京都帝国大学文科大学史学科選科を修了した。

竹林は「わたくしは図書館史の研究に当って、どんな瑣事であっても必要とあれば、それを探究する労を惜しむものではない。若かりしころ内田銀蔵先生の史学研究法の講義と演習に陪し、徹底的に叩きこまれたからである。」と回顧している。内田銀蔵は日本経済史の大家で、内田の蔵書の整理をしたこととその史学研究法に触れたことが、竹林をして図書館史研究に向けたきっかけであった。このことは新村出が「図書館に関して内田博士の追想」(『新村出全集 第8巻』中の『典籍叢談』所収)でも触れている。竹林は西洋史を専攻し、坂口昂教授に提出された学部レポート「ハンムラビ法典とモーセ法との比較」が「竹林文庫」<077-152-104>(竹林文庫の<箱一袋一アイテム>の番号)に残されている。ちなみに、内田、坂口は京都帝大史学科の創設期の教授であり、新村も気鋭の言語学科教授で

あった。竹林の研究者への道はこれら京都帝大の学問的雰囲気の中で方向付けられたとい  
ってよいのではなかろうか。

竹林は京大修了後、一時ハワイのホノルルに渡り「日布時事」の記者を勤めたのち、大  
正 5 年(1916)から京都帝国大学附属図書館事務嘱託となり、図書館の仕事を開始する。しか  
し、本業としては西洋史の教師であり、大正 8 年(1919)に同志社大学予科の講師から教授と  
なり、かたわら西洋史、外交史、国際関係の翻訳などを多数手掛けている。西洋史研究者  
としての竹林の仕事はあまり注目されていないようだが、同志社大学図書館に寄贈された  
竹林旧蔵の洋書と『竹林熊彦翻訳集』([041||T9379]に 29 件の翻訳がある。)にそれを知る  
ことができる。

大正 14 年(1925)から昭和 14 年(1939)までの九州帝国大学司書官の時代、37 歳から 51  
歳までが竹林の文字どおり「青壮年」の時期であろう。大学図書館の実務の傍ら、図書館  
学の広範な分野の研究と著作を手掛け、青年図書館員連盟など、図書館運動にも精力的に  
取り組むがこれらは割愛せざるをえない。

さて、「そのころ吉野作造博士を中心に明治文化研究会ができ、『明治文化全集』が出版  
されたり、『新旧時代』が発行されて、明治時代が歴史の対象となりかけた時」、竹林は尾  
佐竹猛、斉藤昌三、柳田泉と出会い、また、東京帝国大学の「明治新聞雑誌文庫」には「一  
番にかけつけて」宮武外骨、蛭原八郎、西田長寿に世話になったという。歴史資料の収集  
と組織化、史料としての新聞雑誌への着目など、竹林の図書館史研究方法論を考える上で、  
明治文化研究の影響は深いものがある。これからの興味深いテーマであろう。

竹林は昭和 9 年から三年継続で帝国学士院の研究補助を受け、さらに昭和 28、29 年度に  
文部省の科研費の助成を受けた。「これらによって作製した資料の抄録六十余冊、切抜帳七  
冊、写真若干がある。小野[則秋]さんは百万円の値打ちがあると評価されている」となげ  
なく書いている資料が、同志社大学図書館で「自筆稿本」として整理された『明治時代に  
於ける図書館の歴史的研究史料』などである。

昭和 14 年(1939)、竹林は九州帝国大学から京都帝国大学司書官に転じた。昭和 17 年  
(1942)3 月の『図書館雑誌』(36 卷 3 号)に発表したのが「田中稲城一人と業績一」である。  
堂々 25 ページに及ぶこの長編は重要な副産物を生んだ。

「その脱稿に前後して遺族田中誠二博士より多大の資料を寄せらるるあり、故人活躍の  
あとを更に深く知るを得た。(中略)過ぐる五月のある日の午後、わたくしは国立大学町に誠  
二博士を訪ひ、稲城未亡人にも面接するの機会を得た。生前親しく教を仰ぐことのできな  
かった稲城先生は、わたくしにとっては遠き過去の存在でしかあり得なかった。その人が  
いまは極く身近に、親しみを感じられたことは望外の幸であった。」(竹林熊彦「田中稲城著  
作集(一)」(『図書館雑誌』(36 卷 6 号)の序言より。)

この短い一文をもって、竹林の田中稲城に対する敬愛の情が分かるが、それとともに  
このとき「田中稲城文書」の寄贈があったことが判明する。(田中誠二博士は商法専攻で東  
京商科大学教授、一橋大学法学部長を歴任。)

竹林は昭和 17 年(1942)8 月には京大を辞した。「京都帝国大学に転ぜしも意に満たず、  
ふたたび江湖に放浪して黄塵に老ゆ。」(「著者自伝」)と竹林は書いている。その事情は今  
置くとして、昭和 18 年(1943)に『近世日本文庫史』を出版、彼の代表作であり昭和 53 年

(1978)には日本図書館協会から復刻されている。

竹林文庫の資料を渉猟していると思いがけない資料を見つけることがある。「新日本の再建と図書館文化(の諸問題)」(<028-058-035>の紙背文書)と題するもので、昭和20年(1945)9月20日付け、すなわち「8.15」の終戦(敗戦)からほどないころの戦後日本の廃墟にあって、竹林の再起への志を知ることができる。(この文書については『文献継承』(金沢文圃閣)19号(2011年10月)に紹介したことがある。このたびデジタル化されたとのことなので、機会があればご覧いただきたい。)

さて、竹林文庫の全体は次の4つの資料群から構成されている。すなわち、竹林熊彦旧蔵書、竹林熊彦文書、田中稲城文書、「自筆稿本」である。このうち、「自筆稿本」は『明治時代に於ける図書館の歴史的研究史料』(69冊)、『医学関連記事覚え書き』(4冊)、『明治時代伝記資料』(38冊)、『日本基督教史資料』(1冊)、『日本洋学資料』(1冊)からなる。

田中稲城文書は書簡、日記等の個人文書を含む記録文書群である。これと対照的に竹林熊彦文書には個人文書はほとんどなく(井上真琴、小川千代子「アーカイブ資料整理へのひとつの試み—同志社大学所蔵田中稲城文書・竹林熊彦文書の場合—」『大学図書館研究』77号、2006年8月)著作の草稿・原稿が相当数含まれている。つまり、竹林の著作、とくに歴史研究の著作に着目してみると、竹林の旧蔵書により彼が参考にした書物が分かり、著作の草稿によりその作成プロセスが分かり、「自筆稿本」によりその情報源が判明し、しかも「史料」の本文が抜書きされ、体系化され、索引カードという検索手段が提供されているのである。

このように見ると、竹林文庫は田中稲城・竹林熊彦文書(アーカイブ)を核として、蔵書と「史料本文」とその索引カード(ライブラリー)からなる、アーカイブ・ライブラリー複合システムというべき機能を有していると考えられる。竹林は、図書館史研究の著作を残しただけでなく、その史学研究法を客観的に示し、しかもその史料・情報源をわれわれ後代が共有できる研究インフラストラクチャーとして残したのである。

ただ、是非注記しておきたいことは、竹林の著作の全体像がまだ必ずしも見えていないことである。私が数えたところでは、竹林は昭和35年(1960)に72歳で亡くなるまでに、単行本を14冊、雑誌論文・記事を296点執筆している。論文・記事の内訳は、図書館関係225点、世界史関係42点、書物文化等29点、となっている。

図書館史研究に限っていうと、『近世日本文庫史』が出たのは戦争中であり(戦後復刻されているが)、戦後の竹林の研究成果である「近代日本図書館の史的研究」(『土』に33回連載)は単行本となっていないのである。この中には、「田中稲城の人と業績」の増補改訂版というべき連載7回分が含まれており、外山正一、湯浅吉郎、片山潜など「近代日本の図書館を築いた人々」のシリーズもある。

竹林文庫は、竹林の著作全体の姿を把握できるようになれば、いっそうその価値が増すことであろう。そして、アーカイブとライブラリーの複合機能を持つシステムとしての多面的な活用の可能性も大きくなると思われる。

(はるやま めいてつ：早稲田大学アジア研究機構台湾研究所 客員上級研究員／2012年9月)